

「二人の亀吉」

A4 個性の伸長

【主題名】 自分らしさに自信をもって

【ねらい】 足が遅いことを友達にからかわれ、毎日暗い気持ちで過ごす吉男が、自分のよさに気づくまでの心の変化を考えることを通して、自分らしさに自信をもって、明るく希望に向かって生きようとする心情を育てる。

憂鬱な秋がやってきた。秋の最大の行事である〈運動会〉がぼくは大嫌いだ。

入学してから4年間、短距離走ではいつもビリ。運動会なんてこの世からなくなってしまう方がいいの……

「あーあ、俺たちのチーム、亀吉がいるから最下位だけ。ついてないなあ。」
サッカー部の隼人が大声で言った。足の遅い僕はみんなの厄介者だ。

運動会の練習が始まるこの時期、みんなが僕のことをこう呼ぶ。「のろまの亀吉」
〈亀井 吉男〉これが僕の名前だ。〈亀吉〉じゃない！

今日も運動会の練習がある。月曜日の朝、僕はのろろと児童朝会の列に並んだ。

「遅いぞ亀吉。校長先生の話が始まっちゃうぞ。」隼人が僕の背中を押した。

「みなさん、おはようございます。今日は嬉しいお知らせがあります。学校のイシガメに赤ちゃんが生まりました。校長室の水槽にいますので、みんな見に来てくださいね。そして、これからも池にいる、亀吉と亀子とおなじくらい赤ちゃん亀もかわいがってください。」

校長先生のお話にクスクスという友達の低い笑い声が僕の耳を突き刺した。

休み時間、廊下でばったり会った校長先生に「亀井くん、校長室にいらつしやい。」と声をかけられた。僕は、校長先生と一緒に校長室に入った。

机の上の小さな水槽に、五百円玉くらいの子ガメが五匹ヒラヒラと漂っていた。手足をパタパタさせて水面から一生懸命首を伸ばしている姿が愛らしい。

「飼育委員の亀井くんに真っ先に赤ちゃんを見てほしかったんだよ。いつも亀の世話をしてくれてありがとうね。もう少し大きくなったら赤ちゃんの世話もお願ひしますね。」

「はい。校長先生」

僕は、家でも亀を飼っている。学校の亀と同じ〈ニホンイシガメ〉だ。日本にしか生



息していない貴重な亀で、今では外来種のミドリガメが増えすぎたために、生きづらい自然環境の中でひっそりと頑張って暮らしている。僕は、イシガメを増やすために孵化した卵から赤ちゃん亀を育てたこともあるんだ。

放課後、僕は亀のえさやりに池に立ち寄った。池を覗くと「キュー キュー」と亀吉が鳴いている。この声は、「はやく、えさちょうだい。」という意味だ。

「よしよし、今おいしいごはんをあげるからね。」

「へー 亀吉同士、仲がいいねえ。こんな亀のどこがかわいいんだよ。」

隼人とサッカー部の連中が僕を囲んだ。

「せいぜいかわいがって竜宮城にでも連れて行ってもらいな。」

「運動会の日は休んで、乙姫様とご馳走食べてるよ。」

「お前がいるとチームが負けちゃうからな。」

口々に言いながら足元に転がっている小石を亀吉に向かって投げつけた。

「シャー シュー」 亀吉が鳴いている。

「怖がっているだろ！ やめろよ!!!」

僕は自分でも信じられないくらい大きな声で叫んでいた。サッカー部のコーチがこちらに視線を向けているのが分かった。

「ちえっ」 隼人たちは顔を見合わせて逃げて行った。

「大丈夫か？」 僕は、亀吉の甲羅を何度も何度も撫でた。

「痛くなかったか？」 溢れる涙が次から次へ池の中にポタポタと落ちた。



その夜、僕は窓の外がオレンジ色に光るのを見た。UFOか・・・？

すると、窓から光線がベッドに差し込み、僕はもう眩しくて目を開けていられなかった。体が宙に浮いているようだ。僕はどんどん高く高く浮かび上がり、すごいスピードで空の上を飛んでいる。

体の下の方で声が出た。

「亀井吉男さん、今日は私を助けてくれてどうもありがとう。私は、学校の池で飼われている亀吉です。」

「えー？」

僕はどうやら亀吉の背中に乗っているようだ。

「竜宮城に行くの？」

「はい。竜宮城は宇宙にあります。乙姫様もお待ちです。竜宮城に到着するまでの時間、乙姫様のメッセージを流しますのでヘッドフォンを着けてお聴きください。」

耳の奥にうっとりするような平和な声が響いた。

「亀井吉男さん、いつも私のかわいいイシガメたちを大事にしてくれてありがとう。お礼を言います。」



あなたは、お友達から『亀吉』と呼ばれて悲しんでいますね。でも、私の亀吉は、とても嬉しく思っているのですよ。生き物を愛し、命を大切にしている優しいあなたが自分と同じ名前で呼ばれていることを。

走るのが苦手でも、のんびり屋さんでもいいではありませんか。ちっとも恥ずかしいことはありません。あなたが、夏休みから朝早く起きて、ランニングしているのを知っていますよ。その努力はいつかきつと実ります。

恥ずかしい人間というのは、人の心を傷つけたり、生き物の命を脅かししたりする人です。命の尊さに気づけない人はかわいそうです。

亀井吉男さん、あなたは、あなたの豊かで美しい心をこれからも大事にしてください。あなたらしさにもっと自信をもって生きていってくださいね。私は、竜宮城からずっとあなたを見守っています。」

メッセージが終了すると僕の体はまた、あのオレンジ色の光に覆われた。光の温かさだろうか、心臓のあたりがじわじわと熱くなるのを感じた。ああ、どんどん天から急降下している。

ドスン！気がつくと、僕はベッドから落ちこちていた。（なんだー夢だったのかあ。もう少しで竜宮城に行けたのになあ。）体がまだフワフワと浮いているような気がする。

僕は、胸に手を当ててギュッと目をつむった。僕を温かく包みこんだあの光のオレンジ色と、心地よい、でも、強く心を打ち抜いたあの言葉を忘れないように……

足元の水槽の中で僕のイシガメが「キャツ キャツ」と鳴いた。



今日も運動会の練習がある。でも、僕の気持ちは晴れ晴れしていた。学校へと走る僕の背中中でランドセルがカタカタと鳴った。前をゆっくり歩いているのは隼人だろうか。

「おはよう 隼人くん。」隼人は驚いたように僕を見つめていた。

作 瑞穂町教育委員会

【発問例】

- ① 吉男は亀吉の甲羅を何度も何度も撫でながら、どんなことを思っていたでしょうか。
- ② 胸に手を当ててギュッと目をつむった吉男は、どんなことを考えていたでしょうか。
- ③ 主題である「自分らしさに自信をもって」について、学習を振り返りながら考えたことを書きまじょう。